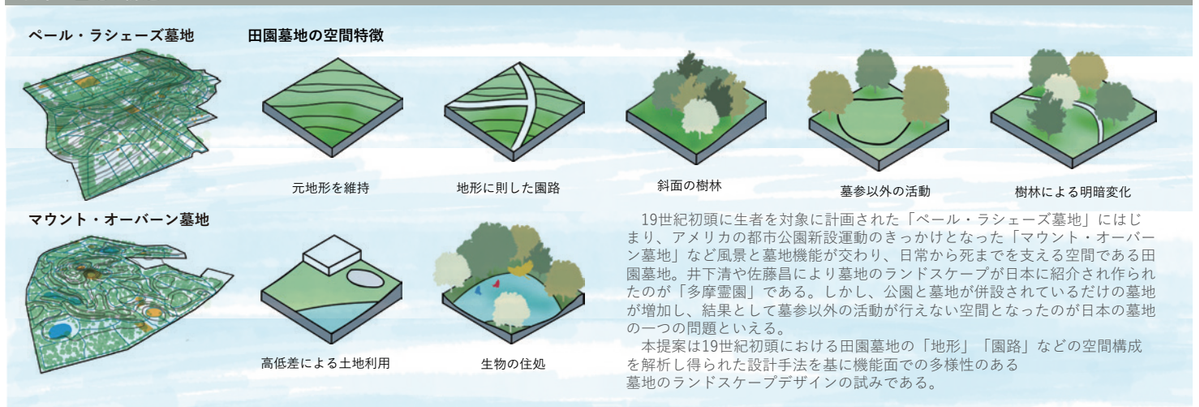
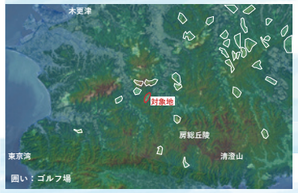
日本の墓地の課題



19世紀初頭に生者を対象に計画された「ペール・ラシェーズ墓地」にはじまり、アメリカの都市公園新設運動のきっかけとなった「マウント・オーバーン墓地」など風景と墓地機能が交わり、日常から死までを支える空間である田園墓地。井下清や佐藤昌により墓地のランドスケープが日本に紹介され作られたのが「多摩霊園」である。しかし、公園と墓地が併設されているだけの墓地が増加し、結果として墓参以外の活動が行えない空間となったのが日本の墓地の一つの問題といえる。

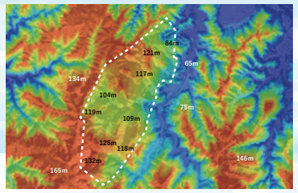
本提案は19世紀初頭における田園墓地の「地形」「園路」などの空間構成を解析し得られた設計手法を基に機能面での多様性のある墓地のランドスケープデザインの試みである。

対象地　千葉県 君津市「カナリアガーデンカントリークラブ」



広域周辺状況

敷地内状況



敷地内高低差

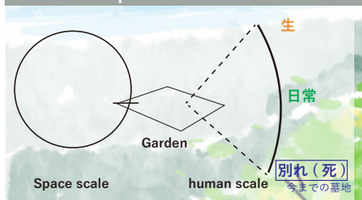
ゴルフ場需要の課題

日本で最もゴルフ場の多い千葉県 君津市の房総丘陵の清澄山と東京湾の中間に位置する閉鎖された99haを有するゴルフ場。
敷地内では50m以上の高低差の変化が起きる起伏に富んだ地形である。

房総半島の将来性

周辺には多数のゴルフ場が存在し、山々が穴あけの状態であり、対象地の放置された広大な土地の自然再生と再利用が急務である。

Funeralscape

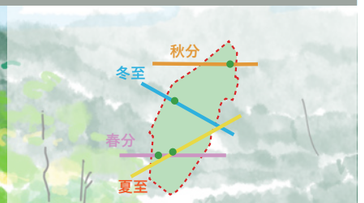


宇宙のスケールと人間のスケールをつなぐ「庭」

古来より日本は心の拠り所として地上に宇宙を庭園として具現化してきました。
地球上の命は宇宙の時間スケールではほんの一瞬の出来事。今までの墓地は「別れ」のみであったが「生」「日常」を入れ込むことで「一生」を体験し宇宙（自然）の循環とつながりを実感する。

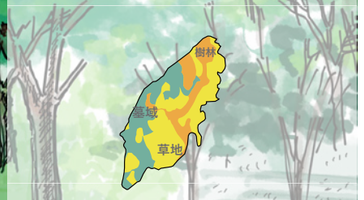
天と地

標高の高い部分は天に近い「墓域」に標高の低い部分は下界「生」の空間に。
そしてこれらをつなげる中間部分は多様なふるまいが可能な「日常」とし、一生を具現化する。



天と地の重なりの瞬間

生命が生存するために必要な「太陽」常に存在するが、節目となるのが「春分」「夏至」「秋分」「冬至」の季節を知らせる動きである。設計手法を基に、敷地内の頂点部四か所を視点場とし、朝日の軸を落とし込むことで天と地のつながりを具現化する。



詳細ゾーニング

田園墓地設計手法を基に分類。既存樹が残る急斜面には周辺の山々から植樹を行い敷地内の自然再生を狙う「樹林」を配置。
他の草地・墓域と隣接し、ゴルフ場の既存園路と設計手法で新規に配置する園路によってシームレスな移動を可能とする。

Funeralscape -土地・場所・身体の纏まり-

田園墓地のデザイン手法を活用したゴルフ場の転換

東京農業大学大学院　農学研究科造園学専攻

金子 将太

kaneko shota

高齢化社会による「墓地不足」と「ゴルフ人口減少による閉鎖及び放棄」。千葉県に位置する99haの閉鎖されたゴルフ場。そこに新たな機能を、付加することで食い潰された自然を取り戻す。大地が自然に戻るように、人もこの世の一瞬から次の世界に旅立っていく。